

平成28年1月21日

## 事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 広島県教育委員会  
 所 在 地 広島県中区基町9番42号  
 代 表 者 職 氏 名 教育長 下崎 邦明

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

## 1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

## 2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	ひろしまけんりつ かもこうとうがっこう	ふりがな	まつい ふとし
学校名	広島県立賀茂高等学校	校長名	松井 太
ふりがな	ひがしひろしましりつ まつがちゅうがっこう	ふりがな	にしだ としのり
学校名	東広島市立松賀中学校	校長名	西田 俊徳
ふりがな	ひがしひろしましりつ ひがしさいじょうしょうがっこう	ふりがな	ふくば かつし
学校名	東広島市立東西条小学校	校長名	福場 克史
ふりがな	ひがしひろしましりつ みそのうしょうがっこう	ふりがな	こうげ まさき
学校名	東広島市立御菌宇小学校	校長名	河下 正紀

## 3. 研究内容

## (1) 研究開発課題

小・中・高等学校の各段階に応じて付けるべき英語運用能力を「CAN-DO リスト」の形で明確にするとともに、教育課程、指導内容や指導方法、教材及び評価について研究を行う。また、実践検証を行い、新しい英語教育のモデルを示すことを目指す。

## (2) 研究の概要

小・中・高等学校の各学校段階を通して、コミュニケーション能力を養い、児童生徒の英語力を向上させることを目的とし、次の4点について開発・改善をしていく。

- (1) 小学校1年生から4年生の外国語活動の指導計画及び授業展開例
- (2) 小学校5・6年生の英語教科化に向けた教育課程, 教材開発, 評価
- (3) 中・高等学校の英語指導内容及び方法
- (4) 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の設定

### (3) 現状の分析と仮説等

#### ①現状の分析と研究の目的

##### ア 子供や学校, 地域の現状について

本地域の2つの小学校は, 平成21年度から, 全学年で外国語活動に取り組んでいる。また, 地域人材等を活用し, ネイティブスピーカーとのT・T授業を7割程度行っている。平成20年の学習指導要領の改訂により, 5・6年生の外国語活動が必修となったが, 指導方法や評価方法について不安をもっている教員が少なくない。平成26年7月に実施した小学校教員アンケートからも, 教材開発や準備, 指導計画, A・L・Tとの打合わせ等が, 授業の充実を図る上で必要だと考える教員が, 6割以上を占めている。このことは, 改訂後, 外国語活動における校内研修がほとんど実施されていないことや, 教材準備やA・L・Tとの連携を取る体制が整えられていないことが要因として考えられる。

そこで, 本事業初年度では各小学校でA・L・Tとの授業研究を10回以上行い, 指導方法や指導内容, さらに評価等について協議をしてきた。そして実際の児童の学びの姿から, 各学年の発達段階に応じた授業展開の在り方について認識を深めることができた。その上で, 次期学習指導要領案を作り, それに基づき評価規準を明確にし, 年間指導計画の作成及び「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を設定した。2年次は高学年の「読むこと」「書くこと」への指導や多様な評価方法等についてさらに研究を進めていく。

中学校においては, J・E・TプログラムのA・L・Tが一月に1週間程度訪問し, 英語科教員とT・T授業を行っている。平成26年7月に実施した生徒アンケートで「英語の学習が好きですか」という設問に肯定的回答をした中学校3年生は78.3%であった。それに対し, 高校1年生は54.6%と大幅に減少している。このことから, これまで小学校との連携や高等学校での学習を見据えた指導が十分でなかったため, 校種間で学びの接続に段差が生じ, 生徒の英語学習に対する戸惑いや意欲の減退を引き起こしていると考えられる。校種間の系統的な接続, 授業改善及び評価方法や内容の見直しが喫緊の課題であると捉え, 本事業初年度では, 小学校から高等学校まで「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を設定した。また, 中学校では授業改善を図るため, 年間を通して授業研究を行った。単元を通して「何ができるようになるのか」という視点で指導計画を立て, 評価方法についても研究を進めた。2年次は学習到達目標において, 校種間の円滑な接続が図られるよう系統性をさらに強化していくとともに, 有効な評価方法等について検証を行っていく。

高等学校は, 3年間で大学入試(特にセンター試験)に対応できるレベルまで学力を引き上げるという使命がある。しかしながら現状は, 入学生の習得内容と高校の授業内容とでは, 相当のギャップがあり, 生徒は高等学校の英語の授業内容を理解することに苦勞している実態がある。また, 自分の考えや意見を論理的に表現するためには, 効果的で質の高いインプットや語彙力が必要であるが, 十分に身に付いているとは言い難い。そのような力を身に付けさせるために3年間を見通した指導計画を作成するとともに, 言語活動の高度化に資する質の高いイ

ンプットとアウトプットを目指す指導方法を確立していく必要がある。

また、姉妹校との交流や外国からのゲストを受け入れる機会を積極的に作り始めたが、実際に対応してみると、コミュニケーションをとるための英語による対話力の向上も課題である。

#### イ 研究の目的

英語での活動や学習を通して、積極的にコミュニケーションを図ることができるように、小学校「外国語活動」及び「英語科」のめざす子供像を明確にするとともに、教育課程、指導内容や指導方法、教材及び評価について研究を行う。

- (1) 小学校1年生から4年生までの外国語活動において、コミュニケーション能力の素地を養うために、児童の発達段階に応じた指導計画及び授業展開を研究する。
- (2) 小学校5・6年生「英語科」における初歩的な英語の運用能力を明確にし、それを養うための指導内容、教材開発の研究に取り組む。平成27年度からは文部科学省から提示される「読むこと」「書くこと」における補助教材を活用、検証していく。また、教育課程のあり方や効果的な指導方法についての実践的研究を行っていく。
  - ※ゴールイメージとして
    - 聞く：簡単なスピーチの内容や、対話の話題を理解することができる。
    - 話す：身近で簡単なことについて自分の考えや気持ちを伝えることができる。
    - 読む：単語や簡単なフレーズの内容が理解できる。
    - 書く：アルファベットが書ける。また、単語や簡単なフレーズについて意味を理解し、まねて書くことができる。
- (3) 中・高等学校において、小学校での英語科の目的や指導内容を踏まえ、英語で発信できる力を確実に付けるための単元構成や指導内容、評価方法について研究を行うとともに、研究推進体制の構築を行う。
- (4) 小学校5年生から高等学校3年生までの小・中・高等学校の一貫した「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標について引き続き検証を踏まえた研究を行う。

#### ②研究仮説

- (1) 英語教育における各学校段階の系統的な教育課程を編成し、目標を達成する指導内容・方法及び教材を開発し活用すれば、英語科の指導を充実させることができるであろう。
- (2) 児童生徒の各段階に応じた付けるべき英語運用能力を小・中・高等学校を通した「CAN-DO リスト」形式で明確に設定し、授業の中で英語を使用する必然性のある場を設けるとともに、実際に英語を使用して活動する体験を増やせば、児童生徒の英語運用能力が高まり、コミュニケーション能力を確実に身に付けることができるであろう。
- (3) 各学校種にサブテーマを設けることで、より焦点化した研究を進めることができ、研究成果の検証及び英語教育の充実に資することができるであろう。

【各研究校のテーマ】

本推進地域テーマ「今後の国際社会を生きる児童生徒のための英語教育の在り方」

＜東西条小学校サブテーマ＞ 「英語を生活化させ、豊かに伝え合う児童の育成」

○めざす児童の姿及び指導の姿

【児童の姿】

「英語を生活化させる」

- ・英語に慣れ親しみ、自然に口に出している児童
- ・自分の考えや思いをもって英語を使っている児童
- ・外国語活動や英語の授業で慣れ親しんだり気付いたり定着したりした英語を、日常の生活の中で使ってみようとする児童

「豊かに伝え合う」

- ・相手や目的などに合わせて英語を使い分けている児童
- ・効果的な方法（ジェスチャー、非連続型テキスト、様々な表現や語彙）で英語を伝えたり、受け取ったりする児童
- ・英語でのコミュニケーションを楽しんでいる児童

【指導の姿】

「英語を生活化させる」

- ・各教科等と関連付けた学習場面を設定するなど、児童の生活と英語の授業の関連を図る指導
- ・個々の考えや思いを実現させ、主体的に課題解決させようとする指導
- ・英語の授業だけで完結せず、問いや知的興味の広がり継続が期待できる指導

「豊かに伝え合う」

- ・協働性を発揮し、互いの立場を理解させて、ともに伝え合いを成立させようとする指導
- ・英語と日本語との違いに気付かせ、英語らしさを実現しようとする指導
- ・自らの表現力を高めようとする指導

＜御藪宇小学校サブテーマ＞ 「英語を生活化させ、『知的好奇心』を高め合う児童の育成」

○めざす児童の姿及び指導の姿

【児童の姿】

「英語を生活化させる」

- ・英語に慣れ親しみ、自然に口に出している児童
- ・自分の考えや思いをもって英語を使っている児童
- ・外国語活動や英語の授業で慣れ親しんだり気付いたり定着したりした英語を、日常の生活の中で使ってみようとする児童

「『知的好奇心』を高め合う」

- ・英語を駆使し、さまざまな相手とコミュニケーションを図ることを楽しむ児童
- ・英語と日本語との違いや文化の違いに関心をもち、他者の考えや意見も取り入れながら、言葉の面白さや豊かさに関心する児童
- ・「知りたい」「分かってほしい」「使いたい」と願い、自ら知的欲求を満たそうとする児童

【指導の姿】

「英語を生活化させる」

- ・各教科等と関連付けた学習場面を設定するなど、児童の生活と英語の授業の関連を図る指導
- ・個々の考えや思いを実現させ、主体的に課題解決させようとする指導
- ・英語の授業だけで完結せず、問いや知的興味の広がり継続が期待できる指導

「『知的好奇心』を高め合う」

- ・指導者が英語の音声や基本的な表現の特性を捉え、計画的に児童への気付きを促す指導
- ・児童の「話したい」「聞きたい」という思いを引き出し、児童相互の考えや気持ちを伝え合わせている指導
- ・言語や文化について体験的に理解を深めさせている指導

＜松賀中学校サブテーマ＞

「生徒の発信力を高める言語活動による豊かなコミュニケーション能力の育成」

○めざす生徒像及び授業像

【生徒像】（付きたい力・見取る姿）

- ◇身近な場面や内容で、目的や状況に応じて主体的にやりとりや発表ができる生徒
  - ・情報や相手の意向などを的確に理解し、適切に応じることができる生徒
  - ・自分の考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明できる生徒
- ◇積極的に英語を用いて、他者との協調、協働を図り、共に課題解決しようとする生徒

【授業像】（授業改善の視点）

- ◇4技能を関連付け、統合的に活用し、生徒が主体的に発信する言語活動のある授業
  - ・思考・判断を伴う活動
  - ・系統性・発展性のある多様な言語活動（スピーチ、プレゼンテーション・ディベート、ディスカッション、作文等）
- ◇実際のコミュニケーションの場面で必要となる言語材料の確実な習得が図られる授業
- ◇英語を用いて他者と協調・協働を図る場面が適切に位置付けられている授業
  - ・プロジェクト学習を効果的に取り入れた授業
  - ・英語によるコミュニケーションの成功体験を味わせる授業

③研究成果の評価方法

【小・中学校】

- ・学力調査
- ・英語に関する調査（児童生徒、教員）
- ・授業アンケート（児童生徒、教職員）
- ・パフォーマンステスト
- ・外部検定試験
- ・教育課程を実施した授業者による自己評価（授業の展開のしやすさ、教材使用、言語活動、指導内容の難しさ等）

【高等学校】

- ・他者評価（生徒、教員、運営指導委員からの評価）
- ・定期テスト及びパフォーマンステスト等
- ・外部検定試験

（4）研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次（H26）	第二年次（H27）	第三年次（H28）	第四年次（H29）
①小学校 外国語活動型	第1学年 0.3コマ	第1学年 0.6コマ	第1学年 0.6コマ	第1学年 0.6コマ
②小学校 教科型	第5学年 1コマ	第5学年 2コマ	第5学年 3コマ	第5学年 3コマ

(5) 研究計画

○第一年次～第四年次，校種別				
	第一年次	第二年次	第三年次	第四年次
全体	◎「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の設定 ・異校種による授業交流 ・地域拠点研修会の実施	◎「CAN-DO リスト」の形の学習到達目標における系統性の強化	評価・改善	
小学校	◎教育課程編成 ・年間指導計画 小1～小4までの外国語活動 小5～小6までの英語科 ・指導方法及び指導内容 ※Hi, friends! 1・2 ※開発教材	◎教育課程編成 ・年間指導計画の学年間の系統性や他教科との関連性を踏まえた改善 ◎評価内容・方法 ・パフォーマンス課題 ◎指導方法・指導体制 ・教員の英語力向上 ・ICTの活用 ※Hi, friends! 1・2 ※開発教材 ※文部科学省補助教材の検証	◎モジュール授業 評価・改善	
小・中学校の系統的なスピーチの指導計画・実践及び評価				
中学校	◎授業研究（小・中及び中・高等学校の接続を考慮した授業の在り方）及び授業内容の見直し ・年間指導計画の見直し ・評価内容及び評価方法の見直し ※SUNSHINE ENGLISH COURSE	◎授業研究（小・中及び中・高等学校の接続を考慮した授業の在り方）及び授業内容の見直し ◎英語で行うことを基本とした授業実践 ・パフォーマンス課題 ・外部検定試験の活用方法	評価・改善	
中・高等学校の系統的なディベートの指導計画・実践及び評価				
高等学校	◎小・中学校における英語教育内容の実態把握 ・小・中学校と合同の学習指導案作成や教材開発，それらを活用した授業実践 ◎CAN-DO リスト形式による学習到達目標に関する研究 ・CAN-DO リスト形式による学習到達目標に基づいた年間指導計画の作成 ・CAN-DO リスト形式による学習到達目標の妥当性の検証 ※CROWN English Communication I ※VISION QUEST English Expression I	◎小・中学校における英語教育を踏まえた授業内容の研究 ・英語による言語活動の高度化のための指導方法の理論研究と授業実践 ・小・中学校の学習指導要領に見られる資質・能力の分析 ・言語活動の高度化に資するインプット及びアウトプットのための指導方法の理論研修と授業実践 ・中・高等学校との接続を意識した教材開発 (相当レベルの教材)	・小・中学校の英語教育の高度化を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の設定	
中間報告会				
研究のまとめ及び報告				

## ○平成27年度の進捗状況・課題

## 【小学校】

## (進捗状況)

## 1 教育課程編成

- ・昨年度作成した本指定地域独自の小学校外国語活動・英語科学習指導要領を基に、CAN-DOリストとの関連を明確にした年間指導計画を作成し、授業実践を通して検証を行っている。
- ・定期的（各学期末及び年末）に年間指導計画の見直しや修正を行い、系統性と実用性の精度を高めている。（12月に本年度2度目の年間指導計画検討会議を実施し、高学年英語科年間指導計画については、中学校・高等学校と様式をそろえた内容に修正した。）
- ・英語科モジュール学習については、平成28年度からの研究実施を見据え、試行として年間で5単位時間（15分×5回×3単元）を実施し、モジュール授業の指導内容、方法、教材等について検討を始めた。
- ・平成28年度モジュール学習の教育課程については、「歌」「インタビュー」「まとまった英語を聞く」「書くこと・読むことに慣れる」のカテゴリーで、通常授業の単元や文科省作成補助教材との関連を整理しながら作成中である。

## 2 指導方法・指導体制

## (1) 研究推進体制

小学校2校の教員が「授業構成部」「指導者英語力向上部」「教材開発部」のいずれかの部に属し、指導方法及び指導体制に係る研究推進に主体的に関与した。（年間2回程度、小学校2校合同研究3部会を実施）

- ・授業構成部…研究授業の計画実施
- ・指導者英語力向上部…指導者英語力向上研修の計画実施
- ・教材開発部…児童の英語力向上に関わる環境整備及び教具開発・整理

## (2) 教員の英語力向上

教員の英語力向上のための研修を定期的（職員朝会や暮会時15分程度）に実施し、特に教室英語の使用（授業に使える英語表現の習得）についての意識や英語運用能力の向上を図った。また、広島大学大学院准教授を講師に招いた英語力向上研修（放課後参加希望者による年5回程度の研修）や英語教育推進リーダー研修受講者（中央研修受講者1名、カスケード研修受講者2名）による伝達講習の機会をもち、より専門的視野や今後求められる教員の英語力に根差した研修を実施した。

【教員の英語力向上基本コンセプト】（平成27年度はStep2を重点化）

段階	研修目的	研修内容例
Step 1	モチベーション向上	挨拶・自己紹介等簡単な会話研修
		アクティビティ体験研修（児童の立場で活動）
		4技能体験研修（スピーチ・詩の音読・詩の作成 等）
Step 2	クラスルームイングリッシュ活用力向上	英語教育で使用する指示やほめ言葉演習
		ジェスチャー演習・教室内移動指示演習
		アクティビティ指示演習
Step 3	ALTとの連携	指導計画連携演習

## (3) ICT の活用

ほぼ全ての授業において電子黒板や大型モニターを活用した授業を実施し、Hi, friends! 1・2・Plus や自作（作成絵本、フラッシュカード、スライド、動画 等）のデジタルコンテンツを活用した。また、市教委や業者、広島大学からタブレットや電子辞書の借用、ミュージックプレイヤーの活用、PC ルームの使用等、ICT 機器の積極的使用による指導方法の工夫を進めている。

## 【ICT の活用具体例】

	目的	活用の方法
作成絵本	実際の発話場面を意識させる。	英語や日本語の絵本をスライドに加工したり、絵本の続きを創作してスライドに加工したりする等して提示する。 
フラッシュカード	<ul style="list-style-type: none"> <li>語彙や表現の定着を効率的に行う。</li> <li>文字を手掛かりに語の認識や語順への気付きを促す。</li> </ul>	絵を連続表示し、フラッシュカードとして利用したり、複数のスライドを組み合わせることで英語の語順等を気付かせたりする。 
スライド	文字と発話内容（言葉や表現の意味）をつなげる。	イメージ画像と歌詞（文字）を同時に見せながら歌を歌わせ、文字を手掛かりにして発話する経験をさせる。 
タブレット	使いたい英語表現に対して、個別に対応する。	やりとりや発表で、児童が使いたい表現をタブレット端末に入れておく。文字を見せ音声練習をした後、英語を選択してその音声を確認できるようにする。（タブレットの表示は英語） 
ミュージックプレイヤー	正しい英語の発音を聞かせる。	ミュージックプレイヤーに音声を吹き込み、児童が発話する表現を何度も聞かせたり、家庭学習に活用させたりする。 

## (4) 研究サブテーマ「生活化」に向けて

児童が必要感を持って英語を学び、児童の興味や授業後の汎用性を意識して、他教科等との関連を図った自作教材を積極的に開発している。それらの教材には、「ミュージカル」や「劇」、「プレゼンテーション」、「歌」等の言語活動があり、発達段階に応じたバリエーションの広がりが見られる。

## (5) 文部科学省補助教材の活用

文部科学省補助教材「Hi, friends! Plus」については、自作教材（自作単元）と関連付け、「文字の認識」「文字と音声との関連への気付き」「語順への気付き」に有効に機能させるための方法を常に検討している。そのため、単元計画の際には「音声への慣れ親しみや理解の際には、文字と音の関連に気付けるような文字や単語の見せ方を工夫すること」、「十分音声で慣れ親しんだ後に、『読むこと』『書くこと』の経験の機会を設けること」、「適用場面に応じた語順への指導機会を設けること」を重要意識項目に据え、それらの指導を補助するものとして「Hi, friends! Plus」を活用したり、その趣旨を指導に反映させたりするよう共通理解している。



## (効果的であった活用事例)

## ○英語科授業における活用

- ・「クイズ1 小文字探し」…歌詞を読む活動及び辞書指導の際の導入
- ・「クイズ6 仲間の言葉を集めよう」「ジングル Two words」…帯活動的でフォニックス指導
- ・付属ワークシート…音声で慣れ親しんだ語句を書く活動（書くことの慣れ親しみ）

## ○モジュール学習における活用

- ・「書き方例 アルファベット」…慣れ親しんだ語句を書く（書き写す）際の書き順指導
- ・「クイズ1 小文字探し」…歌詞を読む活動の際の導入

## (考察)

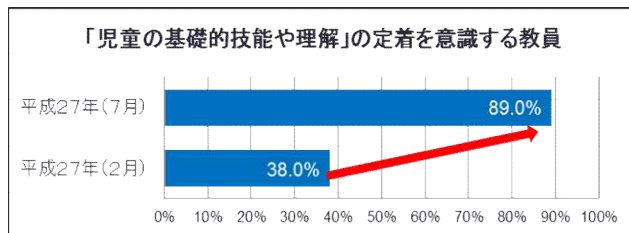
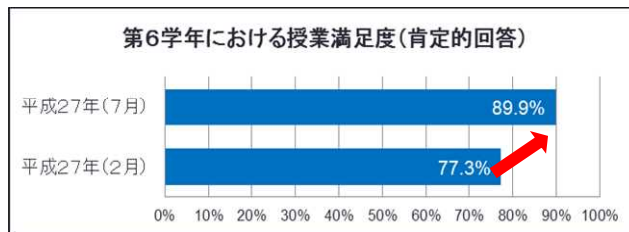
- ・デジタルコンテンツとワークシートが連動しており、「文字の認識」や「文字と音声の気付き」等意識すべき点が焦点化させやすく、大変便利のよいコンテンツである。
- ・本地域で作成した単元計画の構造から考えると活用しにくい部分もあるが、モジュール学習においては短時間で効果的に活用することができる。

## (6) ALT の活用

ALT 不在の研究授業を積極的に行い、ALT に頼らない担任単独の授業経験を積む機会を設けるとともに、ALT と HRT の役割を明確にした授業の在り方について検討している。

## (現時点で見られる成果)

- ・教科化に伴い児童に身に付けさせる学力や英語能力（文字の認識、文字と音声との関連への気付き、語順への気付き文字や文字と音との関連 等）の共通理解を図ることで、これまでの「活動」から「児童の基礎的技能や理解」の定着を意識する教員が増加した。このことは、第6学年児童の学習満足度とも関係があると考え、付けるべき力を明確にした授業の大切さを実感している。



- ・HRTとALTとの発話計画を明確にし、授業の中で活用する教室英語の練習を繰り返して授業を継続することで、教員の英語力の必要感が向上した。(H26:41% → H27:89%)

## (課題)

- ・文字学習や音声と文字、語順との関連に視点を向けた教材開発と「話す」「聞く」力の評価の在り方の研究については、より一層研究を進める必要がある。(「Hi, friends! Plus」の有効活用事例の蓄積、パフォーマンス評価の方法、評価の信頼性の確保)
- ・教員の英語力、評価力の向上のために、その能力に合わせた段階的な英語力向上及び評価力向上のための研修を実施する必要がある。

- ・英語教育推進のために英語の専門性をもつ教員へ依存する傾向があることから学校において英語を専門とする人材の育成が必要である。
- ・指導体制充実のための打ち合わせや計画のための時間の確保が難しい。

## 【中学校】

### (進捗状況)

#### 1 授業研究及び授業内容の見直し

今年度授業研究の柱を次の2点に設定し、授業内容の見直しを図った。

##### (1) 授業研究の柱

- ①「CAN-DO リスト」に基づいた単元の構成
- ②即興的なコミュニケーション場面のある授業の展開

##### (2) 授業内容の見直し

- ①「CAN-DO リスト」に基づいた単元の構成となるよう授業内容の見直しを行った。

(見直しのポイント)

- ・「CAN-DO リスト」に基づき、本単元のゴールイメージを明確にすること。(評価規準の明確化、発話例の具体化)
- ・ゴールを達成させるために必要な要素を明確にすること。(言語材料の吟味、慣用表現の見立て)

- ②即興的なコミュニケーション場面のある授業となるよう見直しを行った。

(見直しのポイント)

- ・その場で考えながら話す実際のコミュニケーションの場面を設定すること。
- ・互いの考えや気持ちを英語で伝え合う場面を設定すること。
- ・教科書を素材とし、生徒の知的好奇心を刺激するような言語活動を設定すること。

##### (3) 小・中及び中・高等学校の接続を考慮した授業の在り方

###### ①小・中学校の接続に係る授業の在り方の研究内容

- ・発達段階に応じた段階的な学習到達目標を設定した「CAN-DO リスト」の作成
- ・授業参観及び研究協議、小学校における学習内容や指導方法及び小学校の学習を踏まえた授業内容の検討
- ・小学校で学習した授業内容との関連付けを記入した年間指導計画の作成
- ・教室で使用する系統性のある指示、肯定的評価の在り方(ほめ言葉)についての交流

###### ②中・高等学校の接続に係る授業の在り方の研究内容

- ・発達段階に応じた段階的な学習到達目標を設定した「CAN-DO リスト」の作成
- ・英語検定に係る取得率目標設定や授業における語彙の定着及び言語活動等、取組内容についての協議
- ・授業参観及び研究協議、学習内容や指導方法及び高等学校の学習を見据えた授業内容の検討

#### 2 英語で行うことを基本とした授業実践

今年度、次の視点で授業実践を行った。

- ・生徒の発達段階に応じ、系統性のある指示及びほめ言葉の積極的使用
- ・生徒と教員、生徒どうしが、互いに英語でコミュニケーションをとるリアルなシチュエーション

ョンのある授業の展開

- ・発話の正確さにこだわらず、内容を重視し、間違いを恐れず自発的な発話を促す授業の展開

### 3 パフォーマンス評価の在り方

今年度、授業研究及び授業内容の見直しに加え、パフォーマンステストの在り方について研究を行った。

- ・「CAN-DO リスト」の形で示した学習到達目標の力を見取るパフォーマンス課題の設定、及び実施
- ・ゴールイメージとなる具体的な生徒の発話例の書き起こし、及び評価規準及び評価方法の明確化
- ・評価規準と評価基準を示したルーブリックの使用

### 4 外部検定試験の活用方法

- ・各学年基本級の年度末取得目標値を設定した。  
(第1学年－5級 80%，第2学年－4級 65%，第3学年－3級 50%)
- ・英語検定の問題分析をし、その内容を各単元と関連付けた授業を実施した。
- ・10月に全生徒を対象に英語検定を実施した。各学年基本級を受験するが、基本級を既に取得している生徒には上の級を受験させ意欲を高めた。(基本級 第1学年－5級，第2学年－4級，第3学年－3級)

#### (課題)

- ・「CAN-DO リスト」に基づいた単元構成における、指導目標、指導内容、指導方法、及び評価の在り方の研究をすすめる。
- ・即興的なコミュニケーション場面を取り入れた言語活動の開発を行う。
- ・小学校・高等学校との接続を意識し、校種間での系統性の整理を行うとともに段階的指導の在り方について研究を行う。
- ・英語で行うことを基本とする授業展開及び評価検証の在り方の研究を行う。
- ・パフォーマンス課題における、評価規準及び評価方法の更なる研究を行う。
- ・外部検定試験（英語検定）の分析を有効的に活用し、授業改善に生かす。

## 【高等学校】

### ○平成27年度の進捗状況・課題

#### ア. 研究テーマと本年度の研究全般について

本年度の本校の研究テーマとして「言語活動の高度化に資するインプット・アウトプット活動」を設定した。本校においては、「言語活動の高度化」を「人間・社会・自然等の抽象的で幅広い話題に関する相手の意見について、まとまりのある文章を用いた意見交換」とし、それに係る「インプット」を「語彙や文法事項の習得」だけでなく「概要や要点を捉えたり、複数の情報を関連付けて解釈すること」、「アウトプット」を

「やりとり、発表、書くことに係る活動」と定義し、研究を進めている。

第1・2学年とも、学習指導案にCAN-DO形式による学習到達目標を位置づけ、各単元におけるCAN-DO（目指す生徒像）を示したうえで、単元末にアウトプット活動を盛り込んだ。

年間計画については、中学校の様式に基づいて作成することにより、中学校との接続を意識したカリキュラムを開発しているところである。また、各科目間の関連性を明確にした上で、それをカリキュラムに反映させたカリキュラムマップを作成していく。

また、定期的に海外からの高校生等と交流するような実際のコミュニケーションの場を設定することで、日頃の学習の成果を試す機会を意図的に与えることにしている。

#### イ. 高等学校第1学年

英語による言語活動の高度化を目指し、アクティブ・ラーニングを基底に据えた授業づくりならびにパフォーマンス課題・パフォーマンス評価の実践を行ってきた。その際、特にインプットとアウトプットのバランスのとれた授業展開を意識している。

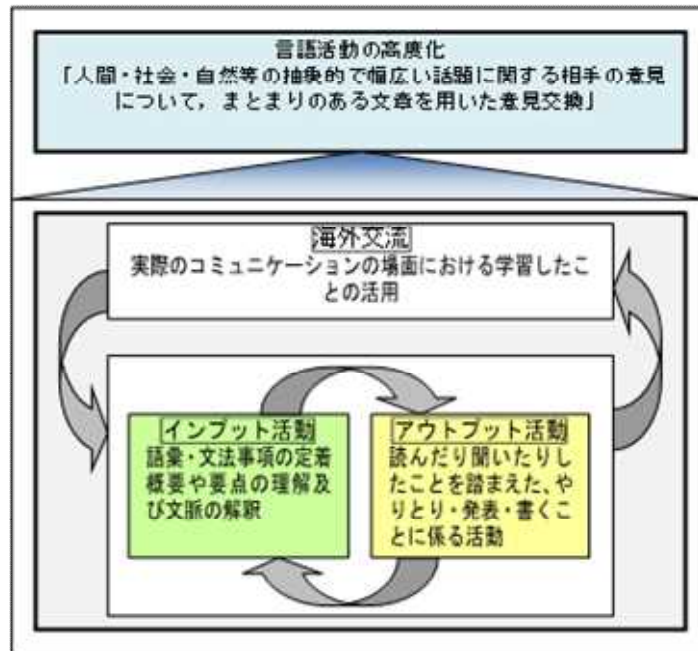
教科書の表現の定着や本文の内容の理解等を円滑に行うためのシャドーイング、スキミング、パラグラフリーディングを4月当初から日々の授業に盛り込むことにより、生徒がこれらを意識して、限られた時間の中で概要把握ができるようになった。また、アウトプットについては、教科書本文を読んだ後でその内容について要約を書かせるだけでなく、教科書本文をリテリングさせることにより、パラフレーズしながら概要を的確に伝える活動を行っている。

文法、語法、語彙については、これらの知識の定着を図るために、単元のセクションごとに復習用のワークシートを作成し、復習用小テストを実施している。

#### ウ. 高等学校第2学年

言語活動を高度化するためには、「知っていること」と「実際にできること」には大きな差があり、十分にインプット活動を行ったうえでアウトプット活動を行うことが重要である。インプットした内容をアウトプット活動の中で実際に繰り返して使うという経験をするこ

### 平成27年度賀茂高等学校研究構想図



で、インプットした文法や言語知識の習得が促進されたり、課題に気付き主体的な英語学習への動機づけとなったりすると考える。

以上のことを踏まえ、第2学年では、次のような活動を行った。

- ・学習した文法・語彙・文構造を定着させるために、本文の暗唱をする。学習した文法・語彙・文構造を使用して発表をしたり文を作ったりするなどのアウトプット活動を行う。
- ・概要や要点をとらえるために、単元の内容をマインドマップにまとめ、マインドマップを見ながら口頭要約をさせたり、要約文を書かせたりする。
- ・やりとりや発話の内容を深めていくために次のことを行った。一つ目は、単元の内容について、なぜ筆者はそう考えたのかを説明させるなど、本文の内容理解の深まりにつながる質問を効果的に行った。二つ目は、単元に関連した分野の複数の文章を読ませることで理解可能なインプットの量と質を高めた。このように、インプットの量と質を高めることで、それらを活用して質の高いアウトプットを行えるようにした。

#### イ. 高等学校第1学年

英語による言語活動の高度化を目指し、アクティブ・ラーニングを基底に据えた授業づくりならびにパフォーマンス課題・パフォーマンス評価の実践を行ってきた。その際、特にインプットとアウトプットのバランスのとれた授業展開を意識している。

教科書の表現の定着や本文の内容の理解等を円滑に行うためのシャドーイング、スキミング、パラグラフリーディングを4月当初から日々の授業に盛り込むことにより、生徒がこれらを意識して、限られた時間の中で概要把握ができるようになった。また、アウトプットについては、教科書本文を読んだ後でその内容について要約を書かせるだけでなく、教科書本文をリテリングさせることにより、パラフレーズしながら概要を的確に伝える活動を行っている。

文法、語法、語彙については、これらの知識の定着を図るために、単元のセクションごとに復習用のワークシートを作成し、復習用小テストを実施している。

#### ウ. 高等学校第2学年

言語活動を高度化するためには、「知っていること」と「実際にできること」には大きな差があり、十分にインプット活動を行ったうえでアウトプット活動を行うことが重要である。インプットした内容をアウトプット活動の中で実際に繰り返して使うという経験をすることで、インプットした文法や言語知識の習得が促進されたり、課題に気付き主体的な英語学習への動機づけとなったりすると考える。

以上のことを踏まえ、第2学年では、次のような活動を行った。

- ・学習した文法・語彙・文構造を定着させるために、本文の暗唱をする。学習した文法・語彙・文構造を使用して発表をしたり文を作ったりするなどのアウトプット活動を行う。
- ・概要や要点をとらえるために、単元の内容をマインドマップにまとめ、マインドマップを見ながら口頭要約をさせたり、要約文を書かせたりする。
- ・やりとりや発話の内容を深めていくために次のことを行った。一つ目は、単元の内容について、なぜ筆者はそう考えたのかを説明させるなど、本文の内容理解の深まりにつながる質問を効果的に行った。二つ目は、単元に関連した分野の複数の文章を読ませることで理解可能なインプットの量と質を高めた。このように、インプットの量と質を高めることで、それらを活用して質の高いアウトプットを行えるようにした。

(6) 評価計画

第一年次～第四年次, 校種別					
	一年次	二年次	三年次	四年次	
小学校	7月	5月 ・英語活用の状況把握 (第5・6学年)	結果分析・授業改善	→	
	12月				8月 ・パフォーマンス会議に基づくパフォーマンステスト
		2月 ・英語活用の状況把握 (第5・6学年)	結果分析・授業改善	→	
教育課程を実施した授業者による自己評価					
中学校	6月	}	結果分析・授業改善	→	
	7月				結果分析・授業改善
	10月	・外部検定試験	結果分析・授業改善	→	
	12月		結果分析・授業改善	→	
教育課程を実施した授業者による自己評価					
高等学校	7月	年間		→	
	11月			・他者評価(生徒, 教員, 運営指導委員)からの評価 →開発した学習指導案及び教材の適切性の検証	→
	12月			・授業アンケート(生徒・英語科教員)	→
	年間			・定期テスト及びパフォーマンステスト等 ・外部検定試験 →学習到達目標の妥当性の検証	→
		年間	・運営指導委員会の指導・助言 →小・中の学習指導要領分析結果の妥当性の検証	→	

## ○平成27年度の進捗状況・課題

## 【小学校】

## (進捗状況)

## 1 評価内容・方法に係る取組

- ・パフォーマンス課題については、「話すこと」（発表・やりとり）の各単元の終末にプレゼンテーションやスピーチ等を位置付け、動画で記録し、評価規準に沿って評価するようにした。（指導者は、本動画を児童英語能力の見取りや授業改善に活用している。）第5・6学年において、「自己紹介」「学校ランキング」「学校インタビュー」「生活紹介」「名言紹介」「行きたい国紹介」等のパフォーマンス課題を行った。
- ・昨年度末、本年度始め、夏季休業中にパフォーマンス会議を実施し、評価基準設定方法や児童のパフォーマンスを見取るために指導者に必要とされる英語能力についての検討を行った。
- ・校内研修において研究授業を実施する際には、提案授業内における児童の「概ね満足する状況」と「十分満足する状況」の動画を基に検討する時間を設け、授業計画時に設定した目標の信憑性と授業者が形成的評価を行う力を高める機会にした。
- ・昨年度作成した「評価規準に盛り込むべき事項等」をCAN-DOリストに基づき修正するとともに、年度初めには校内での共通理解を図っている。第5・6学年は前期通知表において評定結果及び観点別評価（それぞれ3段階）について、保護者に説明している。

## 2 児童の英語活用能力把握に係る取組

- ・広島大学関係者、東広島市外国語指導助手（ALT）、その他英語教育強化地域拠点事業研究関係者（中学校・高等学校教諭等）をインタビュアーにした「英語活用力判定テスト」を第6学年に実施し、インタビューに対する児童の英語活用の様子を動画で記録して分析を行った。第1回判定テストを9月末に実施、第2回判定テストを2月末に実施予定である。（当該インタビューの結果については、広島大学とも連携して分析中である。）
- ・当該校全学級担任をインタビュアーにした「英語活用力判定プレテスト」を第5学年に実施し、インタビューに対する児童の英語活用の様子を動画で記録するとともに、その後の研修資料として活用した。（第6学年判定テストと同日に実施）
- ・「英語活用力判定プレテスト」に関連した事前研修を実施し、インタビューの方法や児童の英語能力の見取り方法について広島大学大学院准教授から講習を受けた。

## (現時点で見られる成果)

- ・パフォーマンス評価の計画をすることで、単元のゴールを明確にした授業設計が進みつつある。
- ・十分満足できる活動状況の児童と、努力を要する活動状況の児童の抽出動画による授業検討会議を繰り返し行うことで、児童を見取る指導者の目が養われるとともに、形成的に評価をする習慣が身に付きつつある。
- ・学習目標と児童の学習や活動の様子を照らし合わせて評価の信憑性を高めるための研修を繰り返し行い、目標と活動と指導と評価を一体化させる必要性の理解が進みつつある。

## (課題)

- ・児童の評価や評定に不安をもっている教員が少なからずいる。これは、自身の英語能力に自信が持てないことや評価の客観性や信頼性に不安があることに起因する。高学年は、英語科として教科の視点で評価していくことが必要である。
- ・指導者が評価することに意識が向きすぎて、適切な指導や支援が行えない場合がある。
- ・今年度前期評定について保護者からの特段の問い合わせ等はなかったが、教科型の授業を実施している学年においては、英語科の評定結果に対する保護者への十分な説明が一層求められる。

【中学校】

(進捗状況)

1. 達成状況

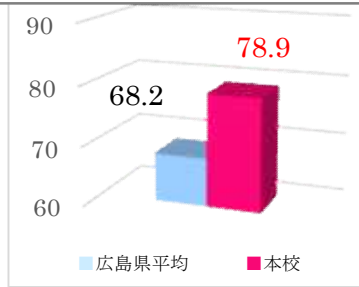
(1) 広島県「基礎・基本」定着状況調査結果 (第2学年)

平成27年度	本校	県
全体通過率結果	78.9	68.2

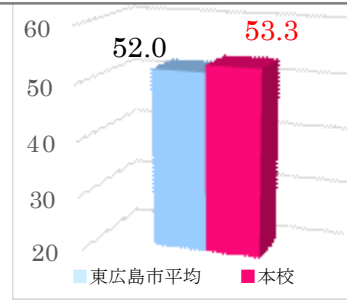
(2) NRT 標準学力調査 (第3学年)

平成27年度	本校	東広島市
偏差値結果	53.3	52.0

(1) 広島県「基礎・基本」定着状況調査



(2) NRT 標準学力調査 (第3学年)



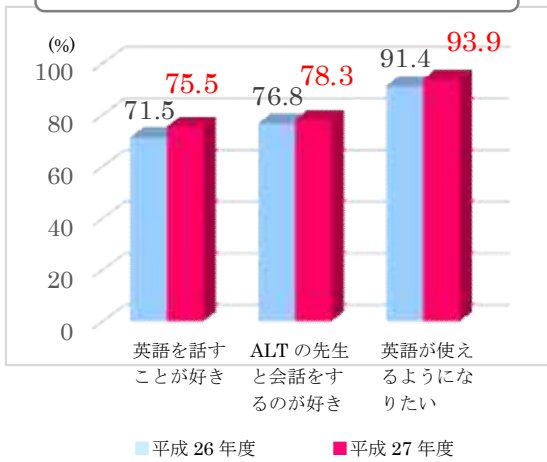
(3) 英語に関する意識調査

	平成27年度	平成26年度	
「英語を話すことが好き」	75.5	71.5	(%)
「ALTの先生と会話するのが好き」	78.3	76.8	
「英語を使えるようになりたい」	93.9	91.4	

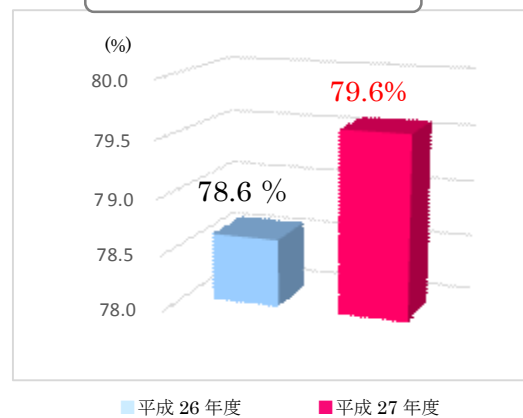
(4) 授業アンケート

	平成27年度	平成26年度	
「授業がよくわかる・わかる」	79.6	78.6	(%)

(3) 生徒意識調査における肯定的回答



(4) 授業アンケート





## (5) 外部検定試験（英語検定）

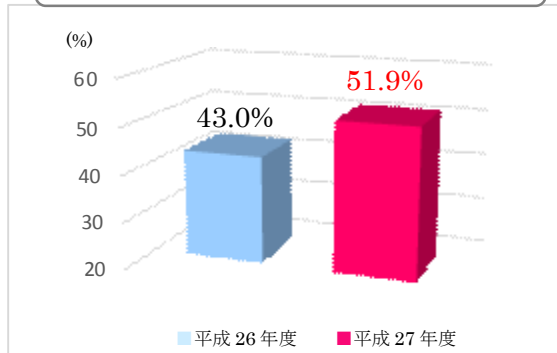
	平成27年度（12月現在）	平成26年度
第3学年生徒の3級取得率	51.9 ※準2級取得者5名含む	43.0

（%）

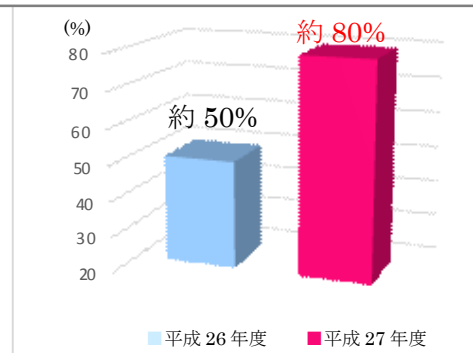
## (6) 授業観察による、授業における英語使用率

	平成27年度	平成26年度
授業における英語使用率	約80%	約50%

(5) 第3学年生徒 英語検定3級取得率



(6) 授業観察による授業における英語使用率（教師・生徒）



## 2. 結果分析・授業改善

今年度の結果を基にこれまでの取組の成果は次の点である。

- ①「CAN-DO リスト」に基づいた単元の構成をし、単元のゴールイメージを明確にすることによって単元の指導目標、指導内容、指導方法及び評価が具体化した授業展開をすることができた。
- ②即興的なコミュニケーション場面のある授業の展開をし、互いの考えや気持ちを英語で伝え合うリアルなシチュエーションを設定することによって、生徒は自分の言葉でやりとりができる喜びを感じ、意欲的に活動に取り組む姿が見られるようになった。
- ③英語で行うことを基本とする授業の展開をし、教師が生徒の発話の正確さにこだわり過ぎないことによって、生徒が間違いを恐れず自発的な発話をする姿が見られるようになった。
- ④外部検定試験（英語検定）の問題を分析し、実際のコミュニケーション場面やそこで用いられる表現等を単元と関連付けて取り入れることによって、生徒がその場にふさわしい発話をする姿が見られるようになった。

## (課題)

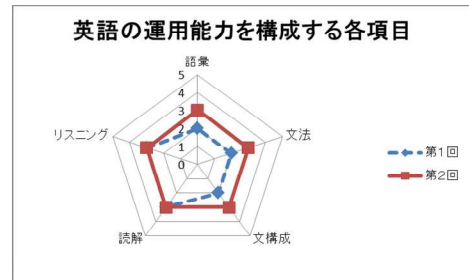
- ・生徒と教員、生徒同士が、互いに英語でコミュニケーションを取り合うリアルなシチュエーションを設定した学習活動の工夫等、実践的研究及び客観的評価検証の在り方について研究していく必要がある。
- ・パフォーマンス評価において、より客観的で整合性の高い評価規準、評価基準、評価方法について研究を進める必要がある。

【高等学校】

平成27年度の進捗状況・課題

ア. 高等学校第1学年

生徒の英語の運用能力を把握する参考資料として、本校で実施しているベネッセのスタディー・サポートの成績推移を見る。英語の学力を構成する各項目について、入学当初に実施した第1回と10月に実施した第2回を比較すると、「語彙」、「文法」、「文構成」が1ポイント上昇したことにより、運用能力のバランスが改善されていることがわかる。これは「コミュニケーション英語Ⅰ」の教科書を用いた学習について、「予習→授業→復習」のサイクルを確立



させる教材開発を行い、特に復習に重点を置いて家庭学習の習慣化を図るとともに、語彙力を伸ばすための週1回の小テストを実施するだけでなく、成績不振者に対して放課後に追指導を継続的に行い、さらに「英語表現Ⅰ」においては、「基礎・基本の徹底」を目標を据え、文法の習得においてパターン・プラクティスを意識したワークシートを中心に授業を展開した成果の表れだと考える。しかし、全体的な運用能力は十分に育っているとは言えず、全体のレベルを上げる必要がある。

したがって、第1学年では「コミュニケーション英語Ⅰ」と「英語表現Ⅰ」の2科目のバランスを考えながら、体系的に文法・語法を学習し、語彙力を伸ばすことにより、より正確かつ円滑なインプットとアウトプットを目指す必要がある。その上で、第1学年の2学期中ごろまでは中学校で行っている表現活動に適切な負荷を加え、それ以降、徐々に、より高度化・複雑化された表現活動に繋げたい。

平成26年度入学生生徒実態調査アンケート結果

質問項目	1年7月	1年3月	2年7月
	肯定的な回答	肯定的な回答	肯定的な回答
1 英語の授業は好きですか	54.6	59.9	64.3%
2 英語の授業は理解できていますか	56.3	57.4	66.1%
3 英語の授業の復習はしていますか	52.1	45.1	46.1%
4 英語の授業でどのような活動が好きですか			
①聞くこと	53.3	43.0	52.6%
②話すこと	44.2	45.1	38.7%
③読むこと	52.9	61.6	70.0%
④書くこと	47.5	50.6	53.9%
⑤対話すること	50.8	46.4	42.6%
⑥発表すること	23.8	14.3	18.7%
9 英語の授業でどのような力をつけたいですか			
①聞くこと	94.2	96.2	97.4%
②話すこと	93.3	95.8	97.4%
③読むこと	92.5	93.2	100.0%
④書くこと	94.6	95.4	98.3%
⑤対話すること	92.9	92.4	90.9%
⑥発表すること	79.2	78.8	73.3%
10 英語の授業で次の活動をやりたいですか			
①Show and Tell	50.4	57.0	43.5%
②presentation	40.4	29.1	29.6%
③discussion	45.4	34.6	39.1%
④debate	43.8	27.0	31.7%
12 高校の英語の授業の中でグループ（またはペア）で発表などをしたいと思いますか	42.9	40.9	37.0%
14 つなぎの言葉や高校入学以後習った文法事項を活用して、英作文を書くことができますか	51.3	49.8	50.0%
15 英語を使えるようになりたいですか	93.8	93.7	95.2%
16 外国の人と友達になったり、外国のことについてもっと知りたいですか	73.3	71.3	78.7%
17 将来、外国へ留学したり、国際的な仕事についてみたいと思いますか	46.7	42.2	48.3%

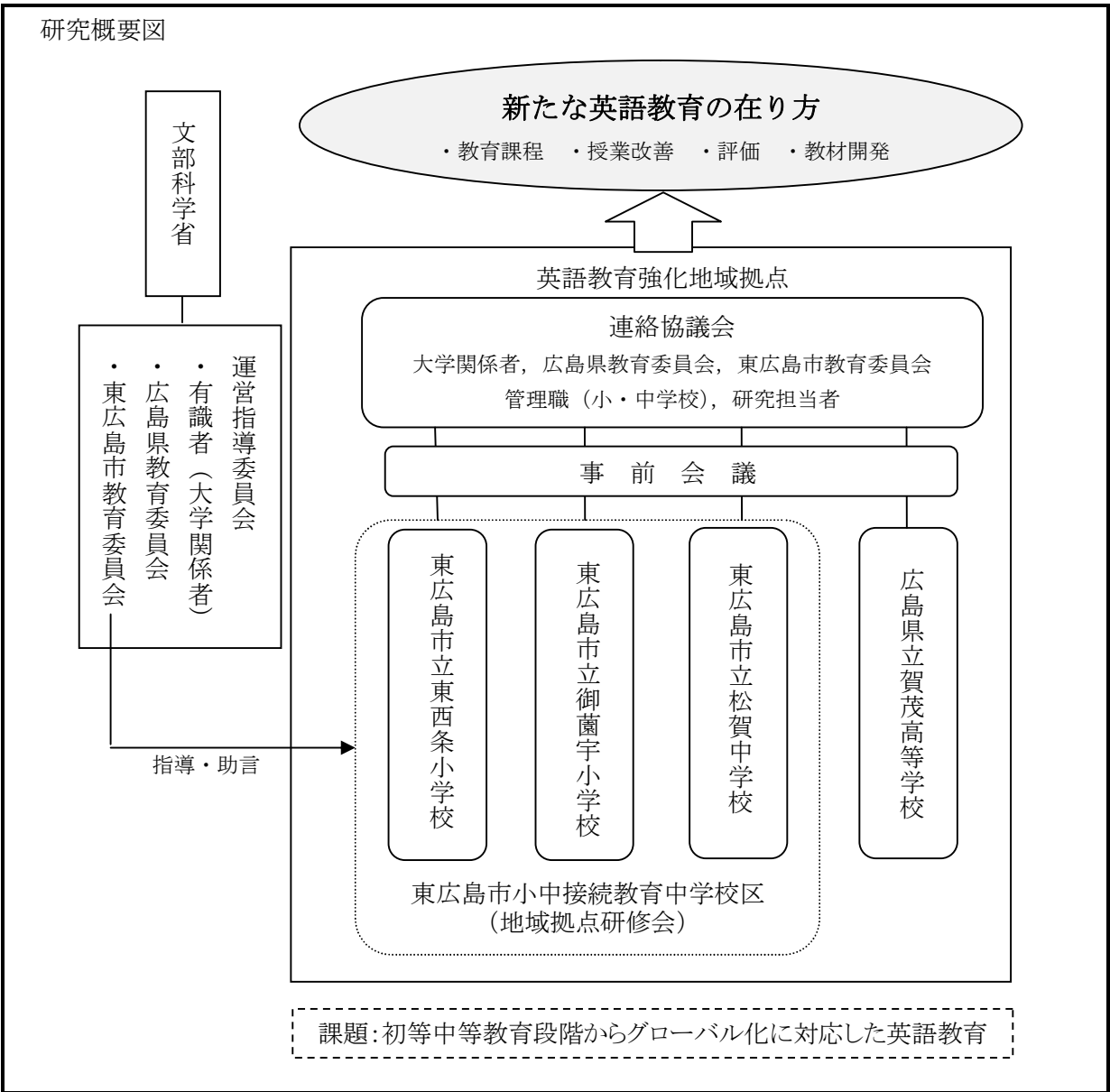
イ. 高等学校第2学年

生徒の英語学習への意識の変容を見るために、定期的に生徒実態調査アンケートを小中高で行っている。2学年において、昨年度と同様の生徒実態調査アンケートを7月に実施した。その結果、英語の授業に対する肯定的な回答は1年次の54.6%から64.2%に増えた。高校の英語授業で身に付けたい力については、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」全てにおいて昨年同様90%以上の肯定的な回答があった。一方で、それぞれの技能に係る授業中の活動については、肯定的な回答の割合が、1年3月と2年6月を比較すると Show and Tell や presentation のような発表は肯定的な回答の割合が下がっているが、discussion や debate のようなやりとりの方は上がっている。これらのことから、英語運用能力を身に付けることに

対する願望は引き続き強く、授業での活動については即興性のある活動に挑戦していきたいと考える生徒が増えてきていると考えられる。これは、1年生の時から定期的に海外からの高校生等との交流を取り入れることで、学習したことの成果を実際のコミュニケーションの場面で試す機会を与えてきた成果の一つだと考える。現在、帯活動などに、段階的に debate や discussion につながる活動を取り入れており、それらにおける表現方法などの指導をしている。今後は幅広い話題について問題意識を持たせ、何を話すか等内容の深まりを持たせる指導をしていく必要がある。そのため、話す内容を深める十分なインプットの指導方法についての研究を進めていく。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



## (2) 運営指導委員会

## ①活動計画

## ○活動計画

## 1 運営指導委員会の実施

本事業の円滑な推進のために、外部有識者及び教育委員会担当者等で構成する運営指導委員会を年間2回実施する。

## (1) 第1回(5月)

内容：研究内容、研究スケジュール等について確認にし、研究の方向性を明確にする。

## (2) 第2回(2月)

内容：1年間の取組を評価し、外部有識者から有効な助言を得ることを通して、次年度以降の研究の方向性及び実践内容を明確にする。

## 2 連絡協議会の実施

本事業の強化地域拠点の研究担当者、管理職、運営指導委員で構成する連絡協議会を年間4回実施する。また連絡協議会を円滑に進めるために、事前会議を設け、連絡協議会の充実を図る。

## (1) 第1回(6月)

内容：①授業参観(高等学校外国語科)

②本事業推進に係る協議(本年度の研究の方向性について)

## (2) 第2回(10月)

内容：①授業参観(中学校外国語科)

②本事業推進に係る協議(取組成果についての中間報告)

## (3) 第3回(12月)

内容：①授業参観(小学校外国語活動)

②本事業推進に係る協議(来年度の推進計画について)

## (4) 第4回(2月)

内容：①授業参観(小学校英語科)

②本事業推進に係る協議(本年度の成果と課題、今後の方向性について)

## 3 地域拠点研修会の実施

## 第1回～第10回

東西条小学校、御菌宇小学校、松賀中学校において、授業交流を通して小中連携を図っていく。また、講師として広島大学の先生を招聘し、指導助言をしてもらう。

## 4 校内研修の実施

各校で校内研修を計画的に実施し、英語の指導力向上に努める。また小学校では、教員の英語力向上が図られるような系統的な研修を行っていく。

## 5 先進校視察

小学校「英語科」に取り組んでいる先進校や中・高等学校において高度な英語教育を行って

いる学校へ訪問し、そこで行われている研究推進やその体制、授業での指導内容、教職員の研修内容等について学び、本地域拠点での実践に生かすことを目的に視察を行う。

## 6 成果の普及

- (1) 小・中学校 公開授業, ホームページでの発信
- (2) 高等学校 公開授業

## ○平成27年度の進捗状況・課題

### (進捗状況)

#### 1 運営指導委員会の実施

##### (1) 第1回(5月)

今年度の実施計画書の確認を行うとともに、研究開発として次のことを今年度の重点取組とし、焦点化させた。

- ・CAN-DO リストの検討・見直し
- ・小学校における英語科指導の研究(新たな補助教材 Hi, friends! Plus の使用と検証)
- ・中学校における「発信力」育成及び英語で行うことを基本とする授業の研究
- ・高等学校における高度化に資するインプットの研究 等

##### (2) 第2回(2月実施予定)

今年度の取組評価を行い、次年度の研究の方向性及び実践内容を明確にする。

#### 2 連絡協議会の実施

授業参観及び協議, また本事業推進に係る協議を行った。各校持ち回りで開催することにより, 異校種間での授業交流ができ, 児童・生徒の英語力の把握を行うことができた。さらに, 大学から有識者3名を招聘し, 専門的な視点から指導助言をもらうことができた。また, 小学校においては, 全教職員が外国語活動及び英語科の指導に関わるため, 授業参観後の協議においては, 開催校の全教職員が参加する機会を持ち, 研修の場を広げた。事業推進に係る協議においては, 各校種の進捗状況を交流するとともに, 今後の方向性を確認することができた。

(1) 第1回(6月: 賀茂高等学校 2年生英語科授業参観)

(2) 第2回(9月: 御園宇小学校 6年生英語科授業参観)

(3) 第3回(12月: 東西条小学校 6年生英語科授業参観)

(4) 第4回(2月実施予定: 松賀中学校)

#### 3 地域拠点研修会

小中学校を対象に, 年間10回の地域拠点研修を予定しており, 現時点で9回実施済である。地域拠点研修会では, 各校種の担当である大学から有識者を1名ずつ招聘し, 指導助言を受けた。毎回, 拠点校内でお互いの授業を参観することで, 異校種間の連携を深めることができた。事後の協議では, 小学校教員から見た中学校の授業, 中学校教員から見た小学校の授業の疑問点や発見, 学びなどを話し合い, 校種間の円滑な接続のために何が必要なのか, 考えを深めることができた。

#### 4 校内研修の実施

各校では、校内研修も定期的に実施し、英語指導力の向上及び研究推進を図った。

小学校では、一部の教員のみが授業提案を行うのではなく、英語指導者全員が授業を公開した。その際、各々が課題意識を持ち、ALT との Team Teaching でない授業、ICT 機器を効果的に使う授業等、提案性のある授業を行うことができた。

中学校では、授業実施前に管理職を交えて英語科教員が学習指導案の検討会を何度も持ち、授業改善を図った。熟考された学習指導案に基づき授業を実施することで、教員の授業力は着実に向上している。また9月には文部科学省調査官の訪問指導を受け、研究内容が整理され、何をすべきかがより明確になり、焦点化された。

#### 5 先進校視察

11月に大阪府寝屋川市小中学校英語教育特別推進地域研究発表会及び大分県全国英語教育研究大会に参加した。寝屋川市においては、小学校から中学校までの学びの接続について、特に音声から文字への移行についての工夫を学ぶことができた。さらに、調査官の講演を聞き、国の最新の動向について理解を深めることができた。また全国英語教育研究大会では、小中高の授業が全体会として公開されたことにより、異校種の英語指導について授業実践から学ぶことができた。視察終了後、参加者は各校において研修報告を行い、情報の共有化を図った。

#### 6 成果の普及

ホームページで取組内容を発信した。小学校や中学校において、教育委員会、大学、小中学校からの視察依頼も受け、研究内容を広めている。また、1月には広島県教育委員会主催の「学力向上のための実践交流会」において、本推進地域の実践を報告した。

#### (課題)

- ・連絡協議会において、CAN-DO リストで示した能力の見取りの進捗状況等を確認することで、計画的に児童生徒の個々の英語力の把握をする。
- ・研究推進する中で、指導事例や使用教材等について有用性があったものを整理し、実践的な成果内容を発信していく。

#### 5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	・平成27年度「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」に関する説明会（文部科学省）	
5月	・第1回地域拠点研修会（中学校）	・第1回運営指導委員会
6月	・第1回連絡協議会（高等学校） ・第2回地域拠点研修会（小学校） ・第3回地域拠点研修会（小学校）	

7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童生徒及び教職員アンケート実施</li> <li>・第4回地域拠点研修会（小学校）</li> <li>・第5回地域拠点研修会（小学校）</li> </ul>	
8月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第6回地域拠点研修会（小学校）</li> </ul>	
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第2回連絡協議会（小学校）</li> <li>・文部科学省調査官中学校訪問指導</li> </ul>	
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第7回地域拠点研修会（小学校）</li> </ul>	
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先進校視察</li> </ul>	
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第3回連絡協議会（小学校）</li> <li>・児童生徒及び教職員アンケート実施</li> <li>・第8回地域拠点研修会（小学校）</li> <li>・第9回地域拠点研修会（中学校）</li> </ul>	
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学力向上のための実践交流会における実践発表</li> <li>・全国連絡協議会（文部科学省）</li> </ul>	
2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第4回連絡協議会（中学校）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第2回運営指導委員会</li> </ul>
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第10回地域拠点研修会（中学校）</li> </ul>	
<p><b>【その他の取組】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第2年次報告書及び第3年次計画書作成（2月）</li> </ul>		